

分類	NO.	テーマ	対象地区	参加者の発言	市長の発言	生涯学習課	補足など	関係課
子育て・教育	1	学校のボランティア活動について	滝野	滝野は、いろいろな意味でボランティアが活発に学校に関わっている地域です。 ただ、正直なところ、それから数年が経ち、「おやじの会」もほとんど活動されていませんし、今日準備した資料にも書かせていただきましたが、地区のボランティア同士の連携がないことが現状です。 同じ人が複数のボランティア活動に関わっていることもあります。実際には、関わらざるを得ないほど人手が足りないというか、関わる人はどこにでも関わっていて、関わらない人はどこにも関わらない。これは多分、どこの地域でも見られることだと思います。 コミュニティ・スクールとさわやかコミュニティの違いが、少し分かりづらくて、さわやかコミュニティがどのくらい子どもたちのために機能しているかという点、正直、まったく縁がないまま義務教育を終えてしまいました。	私の理解では、学校の教育内容そのものではなく、その学校のあり方について、市民の方々と地域の方々のお声を伺いながら作っていくという点が、これまでの「さわやかコミュニティ」よりも、もう一歩踏み込んだ形になるのではないかと理解しています。 ただ、皆さんがよくおっしゃるのは、「違いがわかりません」ということです。市役所内でも、実はまだ暗中模索の状態です。さらに言ってしまうと、国の方では以前から「コミュニティ・スクールを作ってほしい」という方針があり、印西市はその導入がかなり遅れていました。 それを今、改善しようとしているところですが、ただ、作る以上は、これまでと同じことをやっていては重複してしまいますので、そこはしっかりと整理していく必要があると考えています。	—	—	生涯学習課指導課
子育て・教育	2	学校のボランティア活動について	共通	さわやかコミュニティとコミュニティ・スクールが、二重構造になっていることがもったいなくて、さわやかコミュニティも機能していないです。例えば放課後子ども教室も、私たちは月に1回の活動なので、子どもたちにいろいろな体験をしてほしいという思いで関わっています。青少年委員の方々も同じような考えを持っていて、公民館のプログラムなどもあります。子どもたちが参加できる活動はいくつかあるのですが、青少年委員会と「のびっこ」では全く連携がなく、同じ地域のボランティアなのに、組織が違うため協力し合う場もありません。 本当は協力すれば、いろいろなアイデアを出し合えるはずなのに、それができないのは残念です。コミュニティ・スクールができれば、地域で活動している方々が連携し、それをコーディネートする役割の人がきちんといてほしいと思います。ただ、よくある「評議員になりたいだけ」の方や、肩書きにこだわる方ではなく、実際に活動してくれる方がボランティアになっていただかないと、また同じことの繰り返しになってしまうのではないかと、正直思っています。 学校というのは、地域の民生委員さんに対しては少し敬意を払うけれども、私たちのようなボランティアにはあまりそういった扱いはありません。来賓として呼ばれる入学式や卒業式でも、民生児童委員の方々は呼ばれますが、私たちはそうではありません。 市川市など、コミュニティ・スクールの連携が進んでいる地域の話を聞くと、一緒に一生懸命活動している方の孤独感が少しでも軽減されているように感じます。でも、それが本当に拭い去られているかというと、やはり難しい部分もあります。活動は有償ではないので、仕事としてやるわけではありません。一緒に活動してくれる方の人選は本当に重要だと思います。「なんとなくやってくれそう」ではなく、しっかりと実働してくれる方が必要です。	コミュニティ・スクールという制度そのものよりも、実際に活動されている方々の存在が重要だと思っています。地域によって人は本当に違いますので、その地域の中で子どもたちに向き合っている方々が、うまく連携を取れるような体制をどう作っていくかが大切です。 さらに言えば、そうした方々と一緒に学校を造っていくためには、どうしたらいいのかという点が、本来の論点だと考えています。ただ、行政あるあるで、制度が先に来ってしまうというのは反省すべき点でもあります。 もちろん、制度がなければ動かない部分もあるのは事実です。実は、コミュニティ・スクールについては、今年度と来年度で全校に導入するという話もありました。しかし、それを一人で担うというのはさすがに負担が重すぎるということで、少し丁寧に進められるように、何年かに分けて、各学校区ごとに立ち上げていくという話をしているところです。 コミュニティ・スクールについては、印西中学校で導入が始まり、いろいろと暗中模索の状況もあるかと思いますが、実際に動き始めてみてどうなのか、現場の状況を共有いただきながら、こちらとしてもできることはやっていきたいと考えています。 今は、担当がほぼ一人でコミュニティ・スクールを担っているような状況になっているため、足元の課題や現場の実情について、教えていただきたいです。 私が気になっているのは、既存のさまざまな仕組みとの調整です。他の取り組みとの重複がないかどうか、また、これはどこでも言われることですが、複数の団体が存在する中で、横のつながりが弱いという点です。 これは子どもたちに限らず、例えばシニアの方々や、さまざまな困難を抱えている方々向けの活動でも同様です。役割が重なっていたり、活動内容が似ていたりするにもかかわらず、連携する場がない。これは行政で言う「縦割り」の弊害だと思います。	さわやかコミュニティとコミュニティ・スクールの一番の違いは、基本的には「コミュニティ・スクール」には定義があることです。コミュニティ・スクールとは、学校運営協議会という組織を設置した学校のことを指します。 この学校運営協議会は、教育委員会が任命した保護者代表、地域代表、学校代表の方々が集まり、地域と共にある学校づくりを目指して、学校運営やそれに必要な支援について協議する場です。 一方、さわやかコミュニティ推進事業は、地域の方が中心となって学校支援を行う事業です。大きな違いは、学校運営協議会には責任と権限を持つ委員がいるという点です。少し分かりづいかもしれませんが、制度上の位置づけが異なります。 現在、さわやかコミュニティ推進事業については、地域の方々にも説明会を行い、学校運営協議会の機能や、コミュニティ・スクールとさわやかコミュニティの事業が重複する部分について整理を進めているところです。	—	生涯学習課指導課
子育て・教育	3	地域学校協働活動について	共通	地域学校協働活動がさわやかコミュニティに替わっていくということでしょうか。	こうした課題は、コミュニティ・スクールと既存の仕組みの両方に共通していると思いますので、教育長も交えて、今後しっかりと議論を進めていきたいと考えています。	最終的には、地域学校協働本部の設置を目指す方向性ではありますが、これは設置義務ではなく任意のものです。学校運営協議会には努力義務が課されていますが、地域学校協働本部は設置しても、しなくてもよいという位置付けです。実際に、地域学校協働本部の設置を目指している自治体もあります。	—	生涯学習課指導課
子育て・教育	4	地域学校協働活動について	共通	県の研修に参加すると、地域学校協働活動の話が出てきます。その中には、放課後子ども教室も一つの組織としてカテゴリーに含まれていますよね。他にもいろいろな団体の方々が活動されていて、さわやかコミュニティがあることは知っていましたが、具体的にどんな活動をしているのかは分らず、形は整っているのに、何年間も「もったいないな」と思っていました。 今また、そこに二本立てで進めていくなると、さらにもったいないと感じてしまいます。ですので、もしさわやかコミュニティを進めていくのであれば、それがそのままスライドして、設置努力義務のある仕組みに移行できると良いのではないかと思います。 結局、地域の力もそれほど強くないのが現状だと思います。皆さん本当に忙しく働いていて、働いていない方も決して暇というわけではなく、地域においても人手不足が深刻です。これは仕事だけでなく、地域活動にも言えることです。ですから、進めていくにあたっては、そうした現状を踏まえて、体制を整理していく必要があると感じています。		さわやかコミュニティ推進事業については、やはり整理する必要があります。昨年度の終わりに、事務局の教頭先生方にお集まりいただき、今年度か来年度の間に、地域の方々よく話し合いながら、今後の学校支援のあり方について検討していくことをお願いしました。 具体的には、学校とさわやかコミュニティ、そして地域の方々がどのように連携していくか、今後の方向性を2年間かけて調整していく予定です。	—	生涯学習課指導課
子育て・教育	5	学校のボランティア活動について	滝野	滝野小学校にある読み聞かせのボランティアに、ここ何名かが関わっているんですが、以前「読み聞かせはさわやかコミュニティに入らない」という決断をした時期がありました。それは、3万円のお金がもらえるという話があって、そのお金で子どもたちのために大型絵本などを購入できるというメリットもありました。 でも、そうすると会議に出席しなければならぬとか、予算案を提出しなければならぬとか、そういったことが1つのボランティア団体に求められる活動として本当に必要なのかという疑問があり、「それなら入るのはやめよう」という話になったんです。 だから、実態としてそういう背景があるなかで、地域学校協働活動がまた別の枠組みになるとなると、本当に全ての団体が参加してこそ、初めて機能すると思うんですよね。		国では、地域学校協働本部を厳密に決めて運営するというよりも、緩やかなネットワークを作っていくというのが一つの狙いです。まずは、学校と家庭と地域、学校と地域がどのようにこれから学校計画や学校づくりを話し合っていくか、その過程そのものが非常に大事なことだとされています。 このキッズスクールができたからといって、すぐに何かが劇的に変わるわけではありません。まずは話し合いをして、対話を重ねながら、地域と学校のあり方をみんなで考えていこうという、その物語というか、ストーリーの共有が一番大事なんです。	—	生涯学習課指導課
子育て・教育	6	学校のボランティア活動について	共通	今まで、そういったストーリーがなかったのが、それを聞いて「少しずつ進んでいくんだな」と思いました。ただ、実態としては、細かい部分で実際に動かないとか、変わらなかったという実績もありますし、結局二本立てで進めていくと、住民が両方に関わることになってしまいます。 そういう場に顔を出す人って、結局同じ方がまた関わることになるので、住民にも混乱が生じるというか、その辺を整理していただかないと。あつちでも書類を作って、こっちでも書類を作るとなると、本当にペーパーワークだけでボランティア活動が終わってしまう。それは正直、しんどいです。		地域によって、かなりこだわりのある部分もありますので、やはり同じ方向を向いて、学校が目指す学校像と、子どもたちをどのような方向で育てていくのかということを、みんなで共有して育てていくということが、コミュニティ・スクールの大きな狙い입니다。	—	生涯学習課指導課

分類	NO.	テーマ	対象地区	参加者の発言	市長の発言	生涯学習課	補足など	関係課
子育て・教育	7	放課後子ども教室について	滝野	牧の原小学校と滝野小学校は同じ滝野中学校区にあり、コミュニティ・スクールの枠組みでは一つの地域として扱われるはずです。しかし、牧の原小の保護者や子どもたちは、滝野小で行われている読み聞かせや放課後子ども教室の存在を知らず、「なぜ自分たちの学校にはないのか」と疑問を持っているという話を聞きます。 これは、情報が届いていないことと、立ち上げの声を上げる人がいないことが原因だと思います。実際、牧の原ではそうした活動が立ち上がっていません。子どもたちは中学校に進学して初めて、滝野小の放課後教室の存在を知ることになります。 滝野小の子どもたちが「今日のびっこなんだ」と話すのを聞いて、牧の原の子どもたちは「のびっこって何？」と戸惑う。同じ地域に住んでいるのに、こうした体験の差があるのは非常にもったいないことです。 だからこそ、こうした活動が地域で行われていることを、もっと広く知らせていく必要があります。情報が届けば、声が上がリ、活動が広がっていく可能性があると思います。	コミュニティ・スクールは小学校区または中学校区単位で設置されますが、印西市ではまだ正式に区分を決めているわけではありません。印西中学校は中学校区での設置となっています。 地域によってコミュニティの状況が異なるため、全てを一括りにすることが適切かどうかは慎重に検討すべき課題です。例えば、船穂中学校区では、船穂小学校と千葉ニュータウンの小学校では地域性や特色が大きく異なります。これらを一つの枠組みで運営することに対して、私は以前から疑問を持っています。 アフタースクールに関しては、私の中では2つの視点があります。1つは「体験格差」の解消、特に習い事に関するものです。塾などに通う子どももいますが、送迎の負担が保護者にとって大きい。そこで、学校内で放課後の居場所を提供し、そこで習い事ができるようにすることで、子どもにも保護者にもメリットがあると考えています。 もう1つは、地域との接点づくりです。地域によって状況はまちまちですが、私たちは「ユニバーサルサービス」という考え方のもと、全ての子どもたちに体験の機会を提供したいと考えています。千葉市の制度では、習い事とは別に、地域の方々に関わる放課後活動が展開されており、これは印西市でも参考になる取り組みです。 例えば牧の原では、周辺にシニア層が少ないですが、そうした方々に参加していただき、工作や料理などを一緒に行う機会を作ることも可能です。滝野地区ですでに活動が進んでいるので、滝野の皆さんと連携しながら、既存の活動を支える体制を整えていきたいと考えています。一方で、活動がない地域では、民間の力も借りながら進めていく必要があります。 ただし、その際も、関わってくださる方々は地域の方々であるべきだと私は考えています。先日、滝野小の学童を訪れた際、運営スタッフの中に私の知人が3人もいて驚きました。滝野地区の方ではありませんが、私の幼稚園・小中学校の同級生のお父さんや、近所に住む後輩のお母さんなどが関わってくださっていました。 このように、民間だけで経済的に運営するのではなく、地域との連携を前提とした制度設計が必要です。そして、地域差を無視して一律に制度を導入することは絶対に避けるべきだと、改めて感じています。	—	—	生涯学習課指導課
子育て・教育	8	放課後子ども教室について	滝野	現在、私たちの放課後子ども教室は月に1回の活動として運営しています。本来は毎日、子どもたちの居場所として機能するのが理想ですが、文部科学省の方針に基づき、地域住民の力を借りて、体験や学びの場を提供する形で、月1回の開催が精一杯の状況です。 子どもたちの人数は年々増えていますが、ボランティアの体制上、1年生からの受け入れが難しく、現在は学校生活に慣れた2年生以上の児童48名を対象にしています。コロナ前は64名を受け入れていましたが、安全管理の観点から、現在は6～8人の班を8グループに分けて活動しています。1年生の受け入れは今後の目標であり、「小1の壁」を突破するには、どの子も利用できる体制づくりが課題です。 活動の目的は、グループ活動を通じて子どもたちにさまざまな体験をしてもらうことです。保護者の方々もその意義を理解してくださっており、アンケートには「団結力や仲間意識を育む場として期待している」「学校ではできない体験ができる」といった声が多く寄せられています。 特に人気があるのは、バスハイクとクッキングです。クッキングでは、学校では実施が難しいメニューに挑戦し、子どもたちにとって貴重な経験となっています。		—	—	生涯学習課指導課
子育て・教育	9	放課後子ども教室について	滝野	放課後子ども教室に対する保護者の期待は毎年変わらず、「月に2回あったら嬉しい」「横浜のように年500円で放課後キッズクラブがあるといい」といった声もあります。 私たちは、子どもたちが安心・安全にのびのびと過ごせる放課後の居場所を目指しています。学校とは少し違う形で、異学年の小グループ活動を通じて、低学年から高学年までが一緒に活動することが、子ども教室の魅力だと考えています。 地域とのつながりも大切にしており、卒業後も「のびっこだったよね」といったつながりが続いています。中学校で調理室を借りる際にも、卒業生が手伝ってくれるなど、活動の輪が広がっています。		—	—	生涯学習課指導課
子育て・教育	10	放課後子ども教室について	共通	地域を置き去りにしない形で民間に関わることが重要だと感じています。 滝野でも、コミュニティ・スクールや地域学校協働本部があれば、活動の負担がもう少し軽くなるのではという思いがあります。継続していいことは本当に大変で、家庭の状況も仕事や介護などで波があり、常に安定した活動を提供するのは難しいです。 それでも、子どもたちは毎年同じような活動を期待しますし、保護者も「去年は新聞があったのに、今年はないのね」といった反応があります。私は今は「できなくなった」と割り切れていますが、やはり「もう少し支援があれば」「連携があれば」と思うこともあります。 そうした意味でも、コミュニティ・スクールが機能していくことは大切ですし、民間に関わる放課後子ども教室も十分にありだと思います。ただ、その中で地域の人はどう関わるかが重要です。民間は仕事として関わるので、地域との連携がどう築かれるかが鍵になります。 子どもたちのことを一緒に考え、目指していける組織であることが理想です。滝野としても、今の形をずっと続けたいわけではなく、もし毎日子どもを預けられる場所が選べるようになるなら、それは非常に大きな意味があると思います。自由に預けられる環境があることは、保護者にとっても子どもにとっても大きな安心につながります。	本日のお話を伺う中で、2つの課題があると感じました。1つは、保護者が共働きではないご家庭のお子さんたちの居場所について。もう1つは、小学4年生以上、特に中学生以上の子どもたちの居場所の確保です。 現在、印西市では学童保育の対象が小学3年生生までとなっており、それ以降の学年については十分な対応ができていないことが現状です。例えば滝野地区では、先生方にご協力いただき、図書館を学童保育の場として活用するなど、かなり無理をお願いして対応している状況です。 しかし、今後はそれを超えて、日中使用している教室を放課後の学童保育や子どもたちの居場所として開放する体制を検討するなど、抜本的な見直しが必要だと考えています。 より広く子どもたちを受け入れるためには、こうした新しいあり方を検討していかなければならないと、本日改めて強く感じました。	—	—	生涯学習課指導課
子育て・教育	11	アフタースクールについて	共通	市長がおっしゃっていた「習い事を取り入れていく」という点についてですが、例えば幼稚園では、すでにそうした取り組みが早い段階から実現されていると思います。幼稚園の帰りに、子どもたちが体操クラブや英語教室などに通うケースが多く見られます。 それらの活動は、放課後だけでなく、日中の保育にも関わっていることが特徴です。例えば、私の子どもはジャクバの体操教室に通っていましたが、幼稚園の体育の時間もジャクバの先生が担当していました。そのため、放課後だけの関わりではなく、日中の活動からの延長として先生方が関わってくださることで、子どもとの関係性も非常に良好でした。 今後、先生方の働き方改革の中で、地域の方が部活動を担うなどの話も出てくると思いますが、そうした取り組みが単発的なものではなく、日中の教育活動とつながっていくことが重要だと感じています。体育の先生の仕事を奪うという意図ではありませんが、幼稚園での成功事例を見ると、放課後だけでなく、日中からの継続的な関わりがあることが大きな要因だと思っています。民間事業者が関わることについても、一つの意見としてご参考いただければと思います。	例えば、現在プールの授業については、全て民間事業者に委託する方向で検討しています。先生方は非常に気を使っており、昨今のリスク管理の観点や、夏場の屋外プールによる熱中症のリスクなどから、授業が実施できない日もあるためです。 部活動も同様に、民間委託の方向に進んでいますが、その延長として「地域とのつながり」を考える際に、課題もあります。皆さん日中はお忙しいため、地域の方々にどのように関わっていただくかが悩ましいところです。 実際、行政は地域の善意ある方々に頼りすぎていると感じています。もちろん、そうした方々の存在は非常にありがたく、地域の支えとなっているのですが、これまで自治体は、ある意味「おんぶに抱っこ」のような形で進めてきた面があると思います。今後は、そうした方々を支える役割を行政がより積極的に担うべきだと考えています。 そのためには、地域担当の職員を増やしたいという思いがあります。現在、印西市には地域ごとの担当職員がいない状況です。今年度は試験的に木下地区に地域コーディネーターを配置しました。 印西市に入ってから改めて感じたのは、人的リソースが本当に足りていないということです。今後、地域との連携を深めるためにも、体制の強化が必要だと強く感じています。	—	—	生涯学習課指導課

分類	NO.	テーマ	対象地区	参加者の発言	市長の発言	生涯学習課	補足など	関係課
まちづくり	12	人材の活用について	共通	人材の面では、シニアを活用していくのも手だと思います。	こうした取り組みを少しずつ進めていきたいと考えており、実は今年度から会計年度任用職員として、シニアの方に1名入っていただいています。その方には、こうした会議の議事録を整えて作成していただいています。 議事録は非常に重要で、全庁で共有しながら対応を検討するための基礎資料となります。もちろん、生成AIなども活用していますが、その方は一度仕事を退職された後、非常に立派なキャリアをお持ちの方で、再び働くことになった背景には、ご家族、特に奥様から「ずっと家にいるのはやめてほしい」と言われたこともあったそうです。 このように、地域や行政の活動に関わる人材の多様性や背景を踏まえながら、今後も体制づくりを進めていきたいと考えています。	—	—	生涯学習課
市役所づくり	13	バスの借用にについて	共通	今回のタウンミーティング開催のきっかけは、2月の運営委員会で「バスの利用が難しい」と言われたことです。バスが使えないと、子どもたちが楽しみにしているプログラムが実施できなくなってしまう。市の予算をつけていただくか、バスの継続利用をお願いしたいという思いで、今回の場を設けました。実際、バスを借りるには20～30万円の追加予算が必要です。	バスの運行については、実は今、私たちが直面している最大の競争相手は「インバウンド需要」です。この地域では、インバウンド向けの運行単価が通常の2倍から3倍となっており、民間事業者の確保も非常に難しくなっています。 また、今年度もスクールバスを10～12台運行しており、費用は約1億円に達しています。こうした状況を踏まえ、今後は抜本的に市が運営する形に切り替えることも検討しています。市が運営することで、例えば日中の空き時間を別の用途に活用するなど、柔軟な運用が可能になると考えています。	—	—	DX推進課
市役所づくり	14	バスの借用にについて	共通	バスの台数が限られていると聞いており、現在2台しかない状況の中で、もしバスがなくなりそうな場合には、予算をつけてでも継続して運行してほしいと感じています。1台を処分する予定とのお話もありましたが、ハード面だけでなく、ソフト面で工夫することで活用の幅を広げられるのではないかと思います。 例えば、バスを活用できれば、他の子ども教室の活動にも役立ちますし、原山地区でも年に一度くらいは利用できる機会があっても良いのではないかと考えています。そうした点についても、今後相談していければと思います。 また、バスのような市のサービスがあることで、住民の安心感が大きく変わります。市に対する愛着や信頼にもつながりますし、納税の意義も感じられます。還元されるものが目に見える形であることが、市の魅力を高める要素になると思います。	バスの件については、現状を承知しております。すぐに対応するのは難しいかもしれませんが、引き続き検討していきます。	—	令和6年度まで市有バスは3台体制で運行していましたが、車両の老朽化に伴い、令和7年度に1台を処分しました。そのため、令和7年度から市有バスは2台体制での運行となっています。	DX推進課
まちづくり	15	地域活動について	共通	ボランティア自身も活動を通じて学びがあり、他の子どもたちの成長を見ることで、自分の子どもへの接し方にも気づきが生まれます。地域が関わることで、子どもだけでなく大人も成長できると感じています。 学校の中に入って活動することで、OBだけでなく現役の保護者にも関わってもらいたいと思い、見守りボランティアを募集しています。最近では定着してきており、私たちコアスタッフ5～6人に加え、見守りボランティアも5～6人いて、10人体制で子どもたちを見守ることができています。 ただ、毎年新たに加わる方は1～2人程度で、ほとんど増えない年もあります。活動への理解や子どもを預けたいという気持ちはあっても、「自分がやってみよう」となるのはなかなか難しいのが現状です。これは誰が悪いという話ではなく、皆さんそれぞれ一生懸命生活しているからこそ、強要するのは難しいと感じています。	まちなか音楽祭でも、高校生がボランティアで来てくれていました。「明誠の方ですか？」って聞いたら、「違います。証明書もらえるので来ました」って。すごくありがたいですね。「ありがとう」って声をかけたくなるし、そこから地域との接点が生まれるんです。 選挙のときにも、いろんな地域から手伝いに来てくれた方々が「印西市って、どこへ行ってもみんな親切ですね」って言うてくれて。もちろん、全員がそうとは限らないかもしれませんが、やっぱり印西は人がいいんです。 だから、最後に強調したいのは、「制度じゃない」ってことです。この国って、最近は何かとルールや法律を先に決めたがる傾向がありますけど、そうじゃなくて、まずは「人」。地域にどんな人が住んでいて、どんな思いを持っているのか。それを知ったうえで、その人たちと一緒に街を作っていくには何が必要なのかを考える。それが政策を考える順番だと思っています。	—	—	生涯学習課 指導課
まちづくり	16	地域活動について	共通	地域の大人に見守られ、大切にされる経験は、子どもにとって非常に重要です。今後、放課後子ども教室が民間委託されるとしても、仕事として関わる責任感と、地域の目線で関わる責任感・愛情は、それぞれ異なるものです。先生だからこそできること、先生ではないからこそできること、その両方が子どもの成長には必要だと思っています。 先生方にも、私たちが何も考えずに活動しているわけではなく、一人ひとりが思いを持って関わっていることを理解していただきたいです。活動を学校内で行う以上、先生方の理解は不可欠です。子ども教室の普及に向けて、今後は「預かる場所」としての認識を持たれている方にも、活動の意義を伝えていけたらと思っています。	アフタースクールのような取り組みも進めていきたいですが、まずは地域の方々がいて、その方々と一緒に何ができるかを考えることが大事です。そこをしっかりと意識しながら、これから取り組んでいきます。	—	—	生涯学習課
まちづくり	17	地域活動について	共通	子どもたちが大きくなり、大学生くらいになったときに、地域の一人として自然に関われるような仕組みがあるといいなと思っています。 今、のびっこでは高校生がボランティアに来てくれたときに、学校に提出できる「ボランティア証明書」や「活動証明書」を発行するようにしています。受験前に駆け込みで来る子もいるかもしれませんが、そういう「きっかけ」があることが大事だと思うんです。 若い世代が地域に関わることで、地域への愛着も育まれるし、将来的に市への信頼や納税への意識にもつながっていくんじゃないかなと思います。		—	—	生涯学習課 企画政策課